

No. 4 名馬でたどる 千代田牧場 by 有吉正徳

プレイズネイチャ

1985 牝 父 ハードツービート 母 チヨダマサコ
2017 牝 父 キングカメハメハ 母 ホエールキャプチャ

が行われた。牧場のスタッフはこの作業を数時間おきに繰り返し行ったという。補液や乳以外のものを口にしないよう、お手製の口カゴで子馬の口を覆った。「この命を助けよう」。スタッフたちの気持ちはひとつになっていた。

しかし、いつまでもこうしたケアができるわけもない。2週間後の再診で予後は極めて厳しいと診断され、カテーテルは外された。あとは自力で生きていくことを願うしかなかった。

ホエールキャプチャには母親役と同時に繁殖牝馬としての仕事もあった。持病のある娘の世話にかかりきりになると、交配など翌年の出産のための準備に支障をきたす。そこで「育ての親」をつけることになった。

ふつうサラブレッドとは別の品種を乳母にする。サラブレッドと違い、性格が穏やかで実子でなくても受け入れる。サラブレッドを乳母にする場合、手間も時間もかかる。しかし、この時はサラブレッドであるスレンダーガールが乳母になった。父アフリート、母は名牝のビクトリアクラウンという血統のスレンダーガールはこの年19歳。それまでに9頭の馬を出産したベテラン繁殖牝馬だった。当歳の子馬は出産後すぐに亡くなっていた。

乳母と新生子馬のマッチングはすぐにうまくいくわけではない。時間をかけ、さまざまな工夫をこらして、スレンダーガールとホエールキャプチャの娘の関係を近づけていった。努力の結果、乳母と娘の2頭は一緒に放牧地を駆け回るようになった。4カ月もすると、仲のいい同期の2頭と連れ立って放牧できるまでになり、消化がいいように作られた特別食を口にして成長した。時折、特別食が飲み込みにくく、咳き込むようなこともあったが、そのうち、食べ物のがどに詰まると、牧柵に首を押し付けて、その詰まりを取り除く様子が見られるようになった。知らぬ間に身に着けた生活の知恵だった。秋には離乳することができた。

1歳になったホエールキャプチャの娘に馬名が与えられた。「プレイズネイチャ」。その馬名には、根性をたたえる、という意味が込められていた。かつて千代田牧場出身の競走馬にプレイズネイチャという同名の

馬がいた。1985年生まれ「初代」プレイズネイチャは幼いころに腰骨を折る大けがを負った。競走馬になれる可能性は低いといわれたが、慢性的な跛行を背負いながら、デビューにこぎつけた。その名付け親で馬主になったのは飯田正剛社長の母・政子さんだ。飯田社長は辞書を引きながら馬名を考えていた母の姿を覚えている。

1988年2月、東京競馬場の芝1800mで行われた新馬戦に出走した初代プレイズネイチャは11頭立ての2番人気という支持を受けた。岡部幸雄騎手が手綱を取ったプレイズネイチャは本命馬の直後の4番手でレースを進めた。最後の直線はその2頭のマッチレースになった。最後はクビ差でプレイズネイチャの勝利。3着馬は2頭から5馬身も離されていた。火の出るようなマッチレース。まさに根性で手にしたデビュー勝ちだった。

プレイズネイチャはその後、2着、3着など上位に食い込むのだが、結局2勝目を挙げることはできず、現役を引退した。父は仏ダービー馬ハードツービート、母はチヨダマサコ。兄は天皇賞・秋、マイルチャンピオンシップ、安田記念を制したニッポータイオー、姉はエリザベス女王杯優勝のタレントイドガールという良血が認められ、種牝馬となった。

腰骨の骨折を克服した初代プレイズネイチャ同様、二代目のプレイズネイチャにも先天性疾患に負けないで育ってほしいと願う気持ちが込められた。

そして2021年4月19日、キズナとの間に牝馬を出産した。のちのオーサムピクチャである。授乳に必要な栄養を十分に摂れないプレイズネイチャに代わって、オーサムピクチャも乳母で育った。結果として、プレイズネイチャは1年限りで繁殖生活を引退した。

プレイズネイチャを語る上で、タレントイドガールは絶対に外せない大きな存在だ。初代プレイズネイチャの姉である。その名の通り才能豊かな牝馬で、美浦の栗田博憲調教師に育てられた。彼女の会心のレースが1987年のエリザベス女王杯（当時は3歳牝馬限定・芝2400m）である。牝馬三冠のかかるマックスビューティを外から並ぶ間もなくかわし、ゴールでは2馬身差をつける完璧な勝利だった。

繁殖牝馬となったタレントイドガールは1991年1月、同じ千代田牧場の牝馬とともに英国に渡った。交配相手に選ばれたのは供用2年目のナシュワンである。ナシュワンは1989年の英2000ギニー、英ダービーなどG I 4連勝を含む7戦6勝の成績を残した名馬だ。1992年1月に英国で出産した牝馬がエミネントガールで

ある。

エミネントガールは中央競馬2戦で繁殖生活に入った。2001年にサンデーサイレンスとの間にできた5番子が牝馬のグローバルピースだった。中央競馬で5戦1勝の成績を残し、クロフネとの間に2008年に送り出したのがホエールキャプチャである。ホエールキャプチャは30戦7勝。ヴィクトリアマイル、クイーンC、ローズS、府中牝馬S、東京新聞杯とG Iを含む5つの重賞勝ちを収めた。そのホエールキャプチャがプレイズネイチャを産み、オーサムピクチャにつながるというわけだ。

改めて振り返れば、起点はミスオーハヤブサという牝馬になる。1973年に当時まだ千葉県にあった千代田牧場で生まれた。そのミスオーハヤブサを振り出しにチヨダマサコ、タレントイドガール、エミネントガール、グローバルピース、ホエールキャプチャ、プレイズネイチャ、そしてオーサムピクチャと血統は引き継がれてきた。一流種牝馬を求めてタレントイドガールを英国に送るなど、その牝系を大切に育て、さらに磨き上げていく手法は、50年という歳月をかけて今も受け継がれている。

千代田牧場の飯田正剛社長は「プレイズネイチャ（2代目）を助けようというスタッフの情熱と精神力には本当に頭が下がる。感謝です」と話した。プレイズネイチャを生まれたころ診てきた獣医師は、飯田社長への年賀状に「飯田さんには（馬の命を）あきらめてはいけないということを教えてもらいました」と書き送ってきたという。

ホエールキャプチャにはプレイズネイチャのほかにも牝馬の産駒がいるが、プレイズネイチャがただ1頭残したオーサムピクチャも、千代田牧場が誇る名牝系の1頭として、これから競走生活を送り、いずれは牧場に帰って、これまでの歴史を引き継いでいく存在になるはずだ。

オーサムピクチャの父はキズナ。プレイズネイチャを生かしたい、と同じ目標に向かって一丸となったスタッフの「絆」がプレイズネイチャの奇跡を起こしたのかもしれない。

◇

有吉正徳（ありよし・まさのり）1957年1月、福岡県出身。1982年、東京中日スポーツで競馬記者デビュー。1992年に朝日新聞に移る。ミスターシービー以降、コントレイルまで6頭の三冠馬を取材。2022年に定年退職し、フリーの競馬ライターに。著書に「2133日間のオグリキャップ」「第5コーナー〜競馬トリビア集」。朝日新聞金曜夕刊「有吉正徳の競馬ウィークリー」は連載20年。週刊競馬ブックで「一筆啓上」、JBBAニュースで「第5コーナー」を執筆。